

## コミンテルンと中国革命の問題について

向 青

〔訳者まえがき〕以下の論文は、『北京大学学報（哲学社会科学版）』1979年第6期（1979年12月20日刊）所載、向青「關於共产國際和中国革命問題」を訳出したものである。本文中〔 〕の部分は訳者がおぎなつたものである。

コミンテルンと中国革命という問題は、歴史学およびマルクス・レーニン主義理論の研究における非常に重要な問題のひとつである。だが長い間、党内のあやまった路線を清算するにさいして、歴史的にコミンテルンにまで及ぶことができなかつたために、コミンテルンと中国革命という問題は、事実上研究することができなかった。60年代にはいり、今述べた解決すべき問題はすでに消滅してしまったから、研究を強化すべきであった。しかし、林彪・「四人組」は社会科学の多くの領域に立入禁止区域を設けた。その中でコミンテルンと中国革命という問題も、大禁止区域となり、ほとんど社会科学の領域における空白になったのである。

歴史学およびマルクス・レーニン主義の研究においては、コミンテルンと中国革命という問題を解明しなければならない理由は、結局のところは、コミンテルンと中国革命の関係の歴史の本来の姿を明らかにすることによって決定されるものである。

建党以後の22年間、中国共産党はコミンテルンの支部であった。中国共産党はコミンテルンの援助によって設立されたのであり、その発展成長もコミンテルンと不可分であった。党内の路線闘争もコミンテルンときわめて錯綜した関係をもって

いたとすることができる。党の正しい政治路線の設定は、コミンテルンと直接的関係をもっていた。一定の歴史的時期においては、毛沢東を代表とする正しいマルクス・レーニン主義路線は、コミンテルンの民族・植民地革命の理論・路線・方針・政策と不可分であった。だが、党内のあやまった路線の発生は、いずれもコミンテルンと根本的に無関係であったというわけではない。たとえば、陳独秀・瞿秋白・李立三・王明・張国燾らの人々のあやまちは、いずれも思想上、さらには組織上においてコミンテルンと一定の関係をもっていた。党内のあやまった路線の是正には、中国共産党内の正しいマルクス・レーニン主義路線が重要な役割を果たしたが、コミンテルンにも功績はあった。あやまった路線のなかには、コミンテルンの援助によって是正された場合もあった。たとえば、陳独秀・瞿秋白・李立三らの日和見主義路線である。あやまった路線にはコミンテルンの援助の下に是正されたわけではないとしても、コミンテルンがいささか是正に援助の手をさしのべたような場合もあった。

毛沢東思想はマルクス・レーニン主義と中国革命との結合であり、一世代前のプロレタリア革命家による集団的英智の結晶である。だが、毛沢東思想の誕生には国際的な条件が存在した。理論上は、レーニンによる民族・植民地革命の学説およびスターリンによる中国革命の性質・任務・前途・プロレタリアートの指導権・農民問題・土地問題・武装問題にかんする学説と、不可分であった。こうした学説はいずれもコミンテルンの会議において提出されたものであり、コミンテルンの組織を通じて中国に伝達されたものである。

中国革命の客観的な歴史過程はコミンテルンと非常に密接な関係をもっていたにもかかわらず、この問題は教学材料や教育現場においてまだしかるべき位置を与えられていない。そのために、党史上の多くの問題がきわめて解決困難なものになってしまっている。文化大革命以前、党史教材に載ったコミンテルンと中国革命の問題は、ごく僅かな量であり、功績は述べられても失敗は述べられていなかった。文化大革命の十年間は、林彪・「四人組」の妨害によって、コミンテルンはきれいさっぱりと党史から消滅してしまい、中国革命・中国共産党・毛沢東思想が世界から隔絶したものであるかのように述べられたのである。

毛沢東同志は、中国革命闘争の勝利は中国の同志が中国の状況を理解するというに依拠しなければならないと述べた。だが、これはけっして、毛沢東同志がコミンテルンと中国革命との関係を研究することに反対であったという意味ではない。事実、毛沢東同志はこの問題に対してかつて多くの論評を行なったのである。たとえば、彼は世界革命の赤旗コミンテルンをかつては高く掲げていた。彼は、北伐戦争・土地革命・抗日戦争に対するコミンテルンの援助や、コミンテルンと不断に成長しつつある各国共産党との間の矛盾についても述べたことがある。彼はまた、中国革命の問題においてコミンテルンが犯した一連のあやまちについても述べたことがある<sup>(1)</sup>。このほか、彼はコミンテルンに対して、「最初と最後は良いが、中間はダメである」とする評価を下したことがある。

我々は次のような現実、即ち、この問題の研究においては外国の多くの歴史研究者が成果をあげており、とりわけ資料の蓄積や整理の領域で多大な成果を獲得しており、それは無視できないものであるという現実を、正視しなければならない。コミンテルンと中国革命という問題の研究領域にかんしては、ソ連の歴史学者はコミンテルンの役割を完全に肯定しており、中国革命がコミンテル

ンとソ連の援助にまったく依存していたと認識している。彼らの見方は、覇権主義に奉仕するものである<sup>(2)</sup>。欧米資本主義国の歴史学者の中にも、中国の民族民主革命に賛成する者はいる。しかし、彼らはマルクス・レーニン主義の中国革命に対する重要な意義を理解せず、世界のプロレタリアートの利益が一致するものであることを理解しないのである。彼らは、コミンテルンと中国革命との関係をソ連による中国の制圧の関係とみなして、コミンテルンの歴史的役割を完全に否定している。我々はマルクス・レーニン主義を指針として、全面的に、歴史的に、实事求是の方針によって、コミンテルンの役割を評価しなければならない。コミンテルンの歴史的功績を肯定するからには、その欠点・あやまりをも指摘しなければならない。このようにしてこそ、党の歴史を科学的に解明し、共産主義運動の経験や教訓を正確に吸収することができるのである。

コミンテルンと中国革命との関係は、党創設期・第一次国内革命戦争時期・第二次国内革命戦争時期・抗日戦争時期など多くの歴史的発展段階を経ている。このような段階におけるコミンテルンと中国革命との関係の重要性や多方面の関係を解明するために、今、それぞれの歴史的時期におけるコミンテルンと中国革命の問題に対する初歩的研究を以下に概説してみたい。

## 1. 中国共産党創立時期のコミンテルンと中国革命

中国共産党創立時期のコミンテルンと中国革命との関係は、十月革命ののちに中国とソヴェト・ロシアとの間の交通が通じたことを端緒とする。この時が、コミンテルンと中国革命とが関係を樹立した出発点であった。この時召集されたコミンテルン第二次代表大会とレーニンの「民族・植民地問題にかんするテーゼ（原案）」とは、中国共

産党建設のための重要な指導思想であった。この時のコミンテルンの主要な政策は、ソヴェト・ロシア支援下に国共合作を実行することであった。しかし、この時期コミンテルンにも欠点やあやまちがあった。それは主要には、国民党の力を過大評価し、中国プロレタリアートの力を過小評価したことである。

第一に、十月革命後中国とソヴェト・ロシアとの交通が開かれたことが、コミンテルンと中国革命との関係が樹立された起点であったことについて。

ロシア十月革命後、中国・ロシア間の交通はまったく跡切れており、両国関係は断絶していた。両国間の革命は、いかなる関係をつけることも不可能であった。中国・ロシア両国関係の打開と中国・ロシア両国間の革命運動との関係は、とりわけ極東におけるロシア革命の勝利にもとづいていた。1918年3月、ブレスト・リトフスク条約の調印によって、ロシアの東方に対する影響が強化された。1919年夏、中国では「五四」愛国運動が発生したが、ロシア赤軍はコルチャックらの白軍をオムスクからイルクーツクへ追い払った。1920年2月7日、ソヴェトはイルクーツクでコルチャックを処刑した。日本・アメリカ・イギリス・フランスの干涉軍は陸続とシベリアから撤兵し、中国・ロシア間の交通が正式に開かれたのである。ヴォイチンスキー（Voitinsky, Grigori 中国名は伍廷康、ペンネームは魏琴）は1920年1月にやっと出獄した。コミンテルンはただちに彼を中国に派遣し、コミンテルン代表としてコミンテルンと中国革命との関係を樹立させた。十月革命後のロシアは、中国の革命家との間に組織的関係を樹立したが、これがマルクス主義の広範な伝播・中国共産党の創立・中国共産主義運動の発展という重大事件を促進したのである。

第二に、コミンテルン第二回代表大会、およびレーニンが大会のために起草した「民族・植民地

問題にかんするテーゼ（原案）」が中国共産党設立の重要な指導思想になったことについて。

ヴォイチンスキーが訪華した主要な目的は、中国のマルクス主義者と会見し、中国共産党設立を援助することであった。建党にさいして最も重要な点は、党綱領を制定して党建設を正しいマルクス・レーニン主義の基礎の上に置くことであった。まさにこの時、1920年6月5日に、レーニンはコミンテルン第二回代表大回のために「民族・植民地問題にかんするテーゼ（原案）」を起草して、中国革命の性質・任務・前途などの問題に対して現実的に回答したのである。レーニンは非常に謙虚であった。彼は、自分は東方の状況に対して理解が十分でなく、各種の意見を拝聴したいと一再ならず声明した。さらに彼は、自分のテーゼは代表に選択してもらうテーゼのひとつとして供給すべきものであるとさえ提言したのである。彼は、民族ブルジョアジーと民族解放運動の問題において、ロイと討論を行ない、ロイに「補足テーゼ」の起草をゆだねた<sup>(3)</sup>。これによってレーニンの思想は更に全面的なものになり、更に完璧なものとなった。

コミンテルン第二回代表大会（1920年7月19日から8月7日まで）のころ、ヴォイチンスキーはちょうど上海で建党を援助していた。中国・ロシア間の交通が開かれる前やちょうど開かれたばかりの時には、コミンテルンはまだ中国の共産主義者を大会に招聘する能力がなく、また時間的にも間にあわなかった。ロシア在住華僑労働組合責任者の劉紹周（沢栄）らがコミンテルン第一回・第二回代表大会に出席して、なん度もレーニンと会見した。劉紹周は、コミンテルン第二回代表大会で中国革命の状況にかんする発言を行なった<sup>(4)</sup>。

中国共産党を創立させるために最初にコミンテルンに派遣された中国共産党員は張太雷である。彼は1921年春、イルクーツクへ行き、コミンテルン極東書記局との間に関係を結び、ついでコミン

テルン第三回代表大会（1921年6月22日から7月12日まで）に参加して、席上短い発言を行なった。この会議に参加した者には瞿秋白もあり、彼は北京の『晨报』特派員の身分で1920年10月にモスクワへ行った。1922年2月、張太雷の紹介で中国共産党に入った。このほかこの会議に参加した者としては中国社会党員の江亢虎、中国アナキストの黃凌霜らもいた。1920年には、ヴォイチンスキー・楊明齊らが設立した上海外交学社で勉強する学生に劉少奇・任弼時・肖勁光・卜士琦・彭述之らがあり、彼らは1921年初めには、ソ連の東方勤労者共産主義大学<sup>(訳1)</sup>へ勉強にでかけた。こうしてコミンテルンは中国革命のために幹部の養成を開始したのである。

1920年8月、コミンテルン民族・植民地委員会秘書、オランダ人マーリン（本名はスニープリート Sneevliet, Hendricus 中国におけるペンネームは孫鋒）がコミンテルン駐華代表に任じられた。1921年4月、彼は中国にむけて出発し、6月に上海に着いた。彼は中国共産党第一回代表大会・西湖会議に参加した。党の三全大会召集時には、マーリンも広東にいた。マーリンは、コミンテルンによる民族・植民地政策の策定に立ちあったことがある。彼は中国共産党の最大限綱領や最低限綱領の制定、統一戦線の樹立に対して、大きな貢献を行なった。

第三に、ソヴェト・ロシア援助の下における国共合作の樹立が、コミンテルンの戦略的決定であったということについて。

コミンテルンの東方における革命活動は、いずれもひとつの根本的任務と不即不離なものであった。それは、東方にソヴェトの友人と支持者とを求めようとすることであった。ソヴェトは中国の共産主義者の支持を必要としただけでなく、孫中山をリーダーとする国民党員の支持をも必要としていた。そこで、ソヴェト・ロシアの援助の下に国共合作を樹立することは、東方におけるコミン

テルンの戦略的決定になったのである。ヴォイチンスキーは中国では建党を援助しただけではなく、1920年秋には孫中山と上海で会見した。これはコミンテルンと孫中山との最初の接触であった。孫中山はソヴェト・ロシアとボリシェヴィキ革命の問題について質問した。孫は無線局を通じてロシアとの関係を樹立することを要求し、軍事援助を希望した<sup>(5)</sup>。

同様に、訪華したマーリンの使命の重点は、革命的統一戦線の樹立であった。1921年12月、彼は桂林で孫中山と会見し、国民党改組および軍官学校設立の問題について相談した。1922年夏、彼は上海で孫中山とまた会見し、共産党員が個人の身分で国民党に加入することを決定した。この方針は孫中山が提案してマーリンが同意したものである。

マーリンによる訪華と中国における革命活動従事の時期に、共産党員張国燾や国民党員張秋白らは極東各国共産党・革命団体代表会議（1922年1月21日から2月2日まで）〔いわゆる「極東勤労者大会」で、モスクワおよびペテログラードで開催された〕に参加した。ジノヴィエフが報告を行なった。会議期間中に、レーニンは張国燾・張秋白・鄧培（労働者代表）と会見した。また、国共合作の可能性も質問した。彼らはレーニンに対して同意する旨の回答を行なった。

1922年、マーリンは一度モスクワへ帰った。彼はラディク（Radek, Karl）に報告し、ソヴェト・ロシアの特使ヨッフエ（Ioffe, Adolf）をつれて中国へ戻った。ヨッフエは北京到着後、まず北方政府〔呉佩孚〕と会談した。だが、外モンゴル・中東鉄道問題の交渉が失敗したために、南下して孫中山と会談を行なった。1923年1月26日、孫中山・ヨッフエ宣言が発表された。その後、孫中山は廖仲愷をヨッフエに随行させて日本へ向かわせ、熱海で具体的な合作案件について相談させた。

ヨッフエの中国滞在期間をみると、1922年11月

2日、陳独秀・劉仁静・王均（労働者）がコミンテルン第四回代表大会へ参加した。この会議で劉仁静発言の趣旨は、中国共産党が孫中山をリーダーとする国民党と統一戦線を樹立するということであった。形態は、共産党員が個人の身分で国民党に加入するということであった<sup>(6)</sup>。事実、陳独秀・李大釗・張太雷・蔡和森はすでに個人の身分で国民党に加入していた。それにもかかわらず、ラディックは中国共産党を批判して次のように述べた。「孔子の共産主義研究室からぬけ出よ」「その議事日程には社会主義なく、ソヴェト共和国もない」等々<sup>(7)</sup>。ラディックの批判は、おそらく彼がマーリンの報告を聴いて、若干の共産党員が個人の身分で国民党に入党することに対して反対したことによるものであろう。1923年1月12日、コミンテルンは「国共合作に関するコミンテルンの決議」を採択した<sup>(8)</sup>。陳独秀はこの文献を中国に持ちかえり、党の第三回大会召集のための指針とした。1923年5月、中共第三回大会召集前に、コミンテルンはまた「コミンテルン執行委員会の中国共産党第三回代表大会に対する指示」を発した<sup>(9)</sup>。この指示は比較的すぐれたものであり、革命のヘゲモニーと労農主力軍の役割についての問題を述べたものである。コミンテルン代表マーリンは1923年10月に中国を離れた。この時には国共合作の完成は真近であり、ヴォイチンスキー、ボロディン（Borodin, Mikhail）、ガリン（Galen, 原名ブリュッヘル Blücher）、カラハン（Karakhan, Lev M.）らが陸続と中国を訪れ、マーリンの活動を引きついでいた。

第四に、国民党の力の過大評価とプロレタリアートの力の過少評価とが、この時期のコミンテルンの主要なあやまりであったということについて。

コミンテルンは、ソヴェト・ロシア援助下の国共合作を切実に樹立しようとして、多くの活動を行ない巨大な努力を行なった。だが、こうした活動に従事するうちに、若干の欠点・あやまりも明

らかになった。その主要な傾向は、国民党の力を過大評価し、プロレタリアートの力を過少評価することであった。マーリンのコミンテルンへの報告、孫文・ヨッフエ宣言、「国共合作にかんするコミンテルン決議」には、いずれもこの傾向があらわれている。たとえば、1922年7月11日にマーリンがコミンテルンに送った報告書の中では、次のように述べられている。「活動はむずかしい条件下に始められた」。中国最大の工業中心地たる上海でも、「われわれが熟知している、かの労働運動は存在しない」。「中国の旧式な労働者組織、ギルドや秘密結社——上海の青幫・紅幫のたぐいは、現代における労働運動の健康な発展を助けるものというよりも、むしろその障害であるといえよう」。彼は述べる。「現在までのところ、労働者はいたるところで農村の家庭とつながりを保持しており、彼らは都市で数年労働したのち、農村に帰るのである」。また、中国農民は階級闘争に参加せず、「農民は全体として中立的である」とも述べている<sup>(10)</sup>。孫文・ヨッフエ宣言では、始めのことばは、「孫逸仙博士は共産組織だけでなくソヴェト制度までも、事実上いずれも中国に移入することは不可能であると考え。なぜならば、中国はこの共産組織あるいはソヴェト制度をして成功せしめ得る状況におかれていないからである。この見解に、ヨッフエ氏は完全に同意した」というものであった。「コミンテルンの国共合作にかんする決議」では、次のように述べられた。「中国では独立した労働運動はなおも薄弱なものであり」、労働者階級は「まだなお完全に独立した社会的勢力に分化していない——そこで、コミンテルンは、若い中国共産党が国民党と合作することを必要なものとする」。陳独秀が執筆した「ブルジョアジーの革命と革命的ブルジョアジー」（1923年4月5日）と「中国の国民革命と社会各階級」（1923年12月1日）とは、まさにこの指導的思想である。実際に、党の第三回大会もこの思想

を受け容れたのである。たとえば「中国共産党第三回全国大会宣言」では、「中国国民党は当然国民革命の中心勢力であって、いうまでもなく国民革命の指導的地位に立たねばならない」と述べられている<sup>(11)</sup>。この時の国民党は国共合作以前の国民党であり、国民党を国民革命の指導者と述べることは、ブルジョアジーが国民革命の指導者であるというようなことを承認するに等しい。

党の創設期にはコミンテルンの中国革命に対する功績はきわめて大きかったが、いうまでもなく欠点や足りないところも存在した。まず、コミンテルンはロシア革命の影響によって中国革命を推進させ、隣りあう二つの国の革命運動をひとつに結合した。ロシアの革命家の努力がなく、コミンテルンの活動がなければ、中国の共産主義運動がかくのごとく迅速に発展することは不可能であっただろう。次に、中国革命について言えば、レーニンが提起した民族・植民地革命の理論はきわめて時宜にかなったものであった。コミンテルンと中国の革命家はレーニンの学説を実践して闘争をすすめた。中国革命はレーニンの学説の正しさを実践的に証明した。なお、コミンテルンの欠点は、理論的にも実践的にも国共関係の問題を正しく解決することができず、国民党の役割を過大評価し、プロレタリアートの力を過少評価したところにあった。

## 2. 第一次国内革命戦争時期のコミンテルンと中国革命

第一次国内革命戦争の時期、コミンテルンは中国革命に対して組織的指導を強化し、ソ連の援助の下に国共合作をなしとげた中国革命を進展させた。しかし、統一戦線においては、右翼的あやまりも生じた。北伐戦争が勝利・発展し、労農革命運動が高揚したときに、スターリンとコミンテルンとは、中国革命の勝利をかちとるための理論と

政策とを明らかにした。「四・一二」クーデターの発生後、コミンテルンとその代表とは、中国の政局を收拾する過程であやまりを犯し、第一次国内革命戦争は失敗に帰した。

第一に、ソ連の援助下に国共合作を実現した中国革命を推進するためのコミンテルンの闘争と、統一戦線における右翼的あやまりとについて。

1924年から、コミンテルンと中国革命との関係はひとつの新たな段階に到達した。すなわち、ソ連の援助下に国共合作をなしとげた中国革命を促進するために闘争する段階である。この段階の特徴は、ソ連と中国革命とが緊密に結びついて、中国国内で国共合作を実行し、中国革命を強力にすすめたことである。この革命を推進するためにコミンテルンは指導を強化し、コミンテルンと中国革命との関係を組織的に緊密化した。このような状況は、マーリンが中国を去り、ヴォイチンスキー・カラハン・ボロディン・ガリンが1923年の下半年に前後して来華したときに始まった。ヴォイチンスキー・カラハン・ボロディン・ガリンらはそれぞれ中国に活動組織をつくり、それぞれの分野で中国革命の実務に参加した。ヴォイチンスキーは上海における中共中央の活動の責任を負い、ボロディン・ガリンは国民党の政治・軍事活動の責任を負い、カラハンは北方の軍閥政府と馮玉祥の国民軍についての活動の責務をひきうけた。実際には、ヴォイチンスキーは陳独秀指導下の上海党中央の活動に対して、ボロディンは陳延年らの指導下の両広地区委員会の活動に対して、カラハンは李大釗指導下の北方党の活動に対して、いずれも重要な指導的役割を発揮していた。これらの人物の中では、カラハンが1926年の「三・一八」<sup>(訳2)</sup>事件後ソ連に帰国したほか、いずれもみな第一次国内革命戦争の全過程を経験した。

第一次国内革命戦争の時期、コミンテルン駐華代表の主要な使命は、ソ連援助の下に国共合作をなしとげた中国革命を推進させることであった。

この使命に対して、ヴォイチンスキー・カラハン・ボロディン・ガリンらは、巨大な貢献を行なった。ヴォイチンスキーは中国で執筆活動を行ない、レーニンの民族・植民地革命の理論を宣伝して、中国労働運動の発展を進展させた。北上後の孫中山〔国民革命をめざす国民会議促進運動のために1924年12月末北京に到着〕による日本問題をめぐるある種の思想的あやまりに対しては、公然たる批判を行なった<sup>(12)</sup>。カラハンは中国では北方の革命運動を支持し、「三・一八」事件の反帝闘争においては、中国人民の側に断固として立った。彼は中国共産党と馮玉祥との統一戦線を支持し、馮玉祥の左傾化を促した。馮玉祥は1926年3月にソ連へ行き、同年9月に帰国してからは劉伯堅・鄧小平らの援助の下で、五原〔当時の綏遠省、現内モンゴル自治区〕にて出陣の誓いをたて、北伐に参加した。ボロディンは、国民党の改組と黄埔軍官学校設立と援助をし、広東革命根拠地で闘争を持続し、広東商団<sup>(訳3)</sup>による反乱の鎮圧に尽力した。彼は1926年以前は「急進的な土地政策に賛成」しており<sup>(13)</sup>、1926年7月の講演では彼は、農民問題は「革命の基礎」であり、土地問題は「中国革命の根本問題」であると考えていた。彼の述べるところによれば、「帝国主義を打倒せよ、軍閥を打倒せよ」というスローガンは結構であるが、土地問題をりっぱに解決しなければならなかった<sup>(14)</sup>。ボロディンの講演は、北伐戦争中の農民運動に対して大きな影響を与えた。

中国共産党はコミンテルンと中国革命との関係を緊密にするために、コミンテルンの会議に党中央からつねに人員を派遣していた。李大釗はコミンテルン第五回代表大会（1924年6月17日から7月8日まで）に、王若飛はコミンテルン執行委員会第五回拡大総会（1925年3月21日から4月6日まで）に、蔡和森はコミンテルン執行委員会第六回拡大総会（1926年2月17日から3月15日まで）に参加した。

しかし、第一次国内革命戦争の時期には、コミンテルンは思想的に国民党を重視し、共産党を軽視したばかりか、行動においては国民党に武器援助を行ない、孫中山死後は蒋介石の軍事力を強化した。こうすることによって中国革命の力を強化できるとコミンテルンは考えたのであるが、実際にはプロレタリアートのヘゲモニーを弱めることになったのである。彼らはロシア革命のワク組みをもってきて、中国革命にあてはめたのである。認識が現実には追いつけなかったのが、中国における大革命の高揚の到来を予想せず、さらには中国革命の勝利をかちとる思想的な準備もしなかったのである。彼らの考えでは、中国革命もロシア革命と同様なものであった。長期にわたって大衆を動員し組織して、武器を取って政権を奪取する時期の成熟するのを待ち、その時が到来したら再び武器を取ろうというものであった。その結果、鉄砲は国民党右派の蒋介石の手に落ち、中国における大革命失敗の禍根を蒔いたのである。中山艦事件<sup>(訳4)</sup>の発生こそ、蒋介石の手に軍事力が掌握されたためであった。

中山艦事件で蒋介石が成功をおさめえた理由は、彼がその手中に軍事的な実権をにぎり、有利な時期を選択したところにあった（当時、コミンテルン執行委員会第六回総会が召集されており、ボロディン・ヴォイチンスキーは帰国していた。北方では「三・一八」事件が発生し、張作霖はカラハンを放逐しようとしており、英・米・日・仏の帝国主義は声高に広東に対する干渉をさげんでいた）。事件後、蒋介石はまた和解を表明し、実際から遊離したコミンテルンおよび幼い中国共産党の認識をマヒさせた。陳独秀は蒋介石への反撃を制止し、蒋介石の軍事力に屈して、右翼的あやまりを犯した。実際にはあやまりはコミンテルンにも帰因していた。なぜならば、ソ連顧問団が蔣への反撃に反対し、陳延年はそれを実行するよりほかなかったからである。続いて、ボロディンは4月29日に

戻ってきたが、ひき続き蔣介石に譲歩し、蔣介石との間に三項目からなる「君子協定」をむすんだ。それは、共産党は蔣介石の提案をうけ入れて国民党内におけるその活動をおさえること、蔣介石はボロディンの主張に「同意」して、「右翼反対派に対する処置を採ること」、ボロディンは北伐戦争にはっきりと同意し支持すること、の三項目であった<sup>(15)</sup>。その結果、「党務整理案」があらわれた。陳独秀の代表たる張国燾は、また、コミンテルンおよびその代表の決定の下で「党務整理案」を推進した。それは実際には広範な党員大衆から遊離しただけではなかった。中央委員の中にも心からそれに賛成した者は誰もいなかった。中山艦事件の処理と「党務整理案」の実行とは、統一戦線問題においてコミンテルンが右翼的あやまりを犯したことを示している。

第二に、北伐戦争勝利の情勢、スターリンによる中国革命の理論の解明、コミンテルンによる中国にかんする土地政策の制定、について。

北伐戦争の勝利と発展、中国労農運動の高揚、とりわけ農民運動の興隆は、世界を震撼させ、中国革命の情勢に対するコミンテルンの評価を変化させた。この時、スターリンとコミンテルンとは、中国革命の勝利をかちとり、中国革命を新たな段階に押しあげるために闘争する準備をしなければならなかったと感じた。コミンテルン執行委員会第七回拡大総会（1926年11月22日から12月16日）は、中国革命の勝利をかちとり、中国革命の前進のために闘争する準備をおこなう会議であった。この会議以後、スターリンは続々と「中国革命の見通しについて」「中山大学学生との会談」「中国革命とコミンテルンの任務」などの著作を発表して、中国革命の理論を陳述した。これは、1920年にコミンテルン第二回大会でレーニンが民族、植民地革命の理論を解明して以来のもうひとつの重大な発展であり、幼年の中国共産党に対しては巨大な援助であった。中国革命をめぐるスターリンの多

くの思想は非常に卓越したものである。たとえばそれは、「中国革命は世界プロレタリア革命の一部分である」とか、「中国革命は反帝反封建というふたつの革命の大潮流の合流である」とか、「民族問題は実質的には農民問題である」とか、中国の非資本主義的な発展の見通しとか、「武装した革命が武装した反革命に反対していることが中国革命の特徴のひとつである」とかいうものである。コミンテルン執行委員会第七回拡大総会是中国問題を中心的議題として、中国委員会を成立させた。会議では様々な提案が行なわれた。たとえば、譚平山の報告、ペトロフのテーゼ、ミフ（Mif）のテーゼ、ラフェス（Rafes）の意見書などである<sup>(16)</sup>。これらの提案を基礎としてロイ（Roy）による提案がおこなわれ、スターリンはこれを支持して中国で土地革命を推進しようとした。ロイは次のように回想する。「1926年11月、コミンテルン執行委員会は新しいテーゼを確定した。テーゼの中心点は、中国革命をその時から土地革命に発展させようとするににあった」<sup>(17)</sup>。この決定は、たしかに中国革命をめぐるコミンテルンの政策のひとつの重大な発展であった。

だが、この会議は依然として、共産党が独立して革命の武装部隊を指導するということを日程にのぼらせてはいなかった。そこで、土地革命も実行できなかったのである。この会議はまだ「党務整理案」を肯定しており、国民党の中に「左派を結成」すればそれだけでよいと考えて、共産党員は国民党に参加するが「そこで指導的地位を獲得することはしない」と述べていた<sup>(18)</sup>。同時に、この会議は蔣介石を中間派として、彼に対して連合しつつ批判するという政策を採ることを確定したが、これもあやまりであった。これらはすべて、中国革命の勝利をかちとろうとするさいには無益なものであった。

第三に、「四・一二」クーデターと、中国革命の時局を救うためにコミンテルンが闘争したさい

の主要なあやまりとについて。

コミンテルン執行委員会第七回拡大総会ののち、ロイ自身が中国に派遣された。彼は広州から長沙をへて武漢にいたり、コミンテルン代表の任に就いた。彼はコミンテルンの土地革命政策を貫徹し、それによって中国革命の勝利をかちとり、中国革命を新しい段階に到達させた。当時ロイは高い地位にあり、1925年以来一貫してコミンテルン幹部会委員に任じられていた。中国では彼はコミンテルン代表団首席代表であった。中国における情況については、三冊の文献が詳細に記述している。それは *M.N. Roy's Mission to China* (Robert C. North & Xenia Eudin), *Revolution and Counter-Revolution in China* (M. N. Roy), *My Experiences in China* (M. N. Roy) の三冊である。ロイは中国に来て、蒋介石が日毎に反動化していくことに気づいた。「四・一二」の直前、ロイは上海で蒋介石と会見する準備をしていたが、行動を起こさないうちに、「四・一二」クーデターが発生した。同じ頃、コミンテルンはアメリカ共産党員アール・ブラウダー (Earl Browder), フランス共産党員ジャック・ドリオ (Jacques Doriot), イギリス共産党員トム・マン (Tom Mann), ロシア共産党員シドル・ストーラー (Sydor Stolar) らからなる代表団を派遣した。彼らは1927年2月、広州から江西省をへて上海に行った。彼らは北伐中に蒋介石が労農運動を鎮圧した反動的活動を理解し、中国で「四・一二」クーデターを体験した<sup>(19)</sup>。彼らは1928年のコミンテルン第六回代表大会が開催されるまで中国に滞在した。

「四・一二」の前後、反ソ反共の嵐は国際的に吹きあれ、中国国内では反動の逆流が渦をまいて南京を砲撃した。ソ連大使館が搜索をうけ〔張作霖軍、1927年4月6日、北京ソ連大使館侵入、李大釗ら逮捕〕、李大釗らが殺害された〔4月28日、北京にて処刑〕。コミンテルンはコミンテルン執

行委員会第八回総会を開催した (1928年5月18日から30日まで)。この会議は中国問題について土地革命を強調したばかりでなく、「真に希望のもてる武装部隊を建設すること」を提起して、著名なコミンテルン五月指示を発した。

だが、この会議は統一戦線におけるあやまりを是正しなかった。「四・一二」以前、スターリンの影響下で3月16日の『ブラウダ』社説は次のように述べた。蒋介石は「国民党の紀律を遵守している」と。4月5日、スターリンはモスクワの幹部会議で再び「紀律を遵守している」と蒋介石をほめたたえた。「四・一二」以後は、汪精衛を盲目的に信用した。ロイは「四・一二」以前、汪精衛をオーヴァーに賞賛した。陳独秀もまた汪精衛と連合宣言を発表した。「宣言」はいたずらに天下太平をとらえて、自己の認識を引き続きマヒさせて、右翼日和見主義の代表作となった。「四・一二」以後、コミンテルンは汪精衛を長とする武漢政府を過大評価し、重大な結果を招いた。コミンテルンはまた、馮玉祥に対しても幻想をいだき、「西北説」をまきちらした。このほか、コミンテルンはソヴェトの実行を許可せず、実際には武装闘争の実行と土地革命の推進とを許可しなかった。これらはいずれもスターリンと関係をもっている。大革命の後期、スターリンの理論上の功績と指導上のあやまりとは兼ねあい、同時的に共存していたのである。

1927年の4、5月、中国共産党は五回大会を召集した。土地革命が会議の中心議題となった。しかし、この時以来、ロイはボロディンと絶えまない論争に入った。ロイは土地革命と反革命陣営に対する反撃とを行なおうとした。ボロディンは統一戦線を維持しようとした<sup>(20)</sup>。コミンテルンはこの論争を決裁しなかった。陳独秀はこの論争では両者の中間に立ち、ボロディンに傾斜していた。つまり、右傾化していた。ロイもまたヘマをしてしまった。彼は汪精衛の信任を得るために、コミ

ンテルンの五月指示を汪精衛にみせた<sup>(訳5)</sup>。このようにして、汪精衛に対して「七・一五」クーデター発動のための口実を与えてしまった。彼らは大革命の失敗に対してともに責任を負っている。毛沢東同志は、大革命後期のボロディンを「そこつ屋」、ロイを「愚人」、陳独秀を自分では意識しない「反逆者」とであると認識した<sup>(21)</sup>。

第一次国内革命戦争の時期、中国革命はコミンテルンの指導下、ソ連の援助下に行なわれた。そこで、この時期のコミンテルンは中国革命と緊密な関係をもっていたという特徴がある。これは、コミンテルンと中国革命全体の発展史において、非常に重要な地位を占めている。第一に、中国大革命の高揚の到来は、中国人民による反帝反封建闘争発展の必然的結果であった。同時に、コミンテルンによる中国革命に対する指導強化と、ソ連の援助による中国革命の実現のための闘争とは、中国大革命の高揚の到来に対しても、大きな役割を果たした。コミンテルンの組織、コミンテルンの中国駐在代表、中国共産党のコミンテルン派遣代表は、いずれも貢献していた。次に、第一次国内革命戦争の時期、スターリンは中国革命の理論をめぐって、中国革命に対して大きな貢献を行なった。コミンテルンは中国革命に対して大きな援助を行なった。第一次国内革命戦争は失敗したとはいえ、その影響は大きく、その経験・教訓は貴重であった。大革命失敗の重要な教訓はヘゲモニー問題であった。コミンテルンは中国共産党を指導して、革命のヘゲモニーを奪取するための闘争を行なったが、革命の軍隊を掌握することはできなかった。中国共産党の幼年期の特徴である陳独秀の右翼日和見主義路線とコミンテルン及びその代表によるあやまりとは、いずれもこのヘゲモニーの問題において十分に表現されている。

### 3. 第二次国内革命戦争時期のコミンテルンと中国革命

第二次国内革命戦争時期は、コミンテルンが大革命後期のあやまりを是正して政策的な転換を始めた時期である。「八・七」会議以後、中国革命の問題にかんしてコミンテルンでは一度分裂が発生したが、急速に統一をおさめた。1929年以後、資本主義の世界経済は危機に突入し、中国革命に対するコミンテルンの若干の分析にも影響があらわれた。中国共産党内には李立三路線が出現したが、それは是正された。コミンテルンによる政治上組織上の「左」翼的あやまりによって、王明の「左」翼日和見主義路線が4年間にわたり中国共産党を支配することになった。コミンテルン第七回代表大会はその「左」翼的あやまりを是正して、反ファッショ統一戦線を提起した。中国共産党は統一戦線の戦術を制定して、中国革命の新しい局面を切りひらいた。

第一に、「八・七」会議以後中国革命の性格の認識をめぐってコミンテルンにあらわれた分裂と統一について。

第一次国内革命戦争の終結と第二次国内革命戦争の開始とは、中国革命に対するコミンテルンの政策に急激な変化を発生させた。この変化は1927年7月14日の「コミンテルン執行委員会の現時点の中国革命についての決議」から始まった<sup>(22)</sup>。党の「八・七」会議はまさにこの決議を基礎に召集されたものである。この決議は、陳独秀の右翼日和見主義を終結させるにあたって大きな功績をもたらした。

コミンテルンによる上述の転換を実行したロミナーゼ（Lominadge, Vissarion）は、ソ連のグルジア地方の人で、スターリンと同郷であった。彼はボロディンよりも14才も若く、1927年にはまだ29才であった。彼の活動に協力していたドイツ人ノイマン（Neumann, Heinz）は彼よりもまだ若く、25才にすぎなかった。党の「八・七」会議はコミンテルン代表ロミナーゼが党の五回大会中央委員会を放擲して召集したものであった。このよう

なやり方は適切ではなかったが、党の六回大会はこれを肯定して、「当時コミンテルンは中央委員会を通りこして、中国の黨員大衆に直接呼びかけて、党の路線を根本的に変換し、党の指導機関を改革するよう要求したが、確かにこれは正しいことであった」と述べた<sup>(23)</sup>。「中共『八・七』会議の全党員に告げる書」は、ロミナーゼが起草して瞿秋白が翻訳したものである。「八七」会議は歴史的な功績をもっており、「八七」会議以後の一時期、活動には成果があった。ロミナーゼは、武装暴動を行なって以前よりも断固とした土地政策の実行を、主張した。1927年7月末、コミンテルンは過去の主張をひるがえして中国でソヴェトを実行することを主張した。このようにして、革命根拠地の発展が得られた。

しかし、中国革命の性質についてのロミナーゼの認識はまちがっており、「左」翼日和見主義であった。彼は中国革命を「継続革命」<sup>(6)</sup>であると考へた。瞿秋白はロミナーゼに追随した。しかし、ロミナーゼの「継続革命」および「武装闘争」の政策はコミンテルン書記ブハーリンには同意されなかった。スターリンはブハーリンとロミナーゼとの間の分裂にさいして慎重な態度を採った。ロミナーゼ、瞿秋白の「武装闘争」が危機をまねいた時、スターリンははっきりとブハーリンの主張に同意した。1927年末、ロミナーゼは帰国してソ連共産党第十五回代表大会に参加した。（広州暴動はノイマンを責任者とした。）大会でロミナーゼは次のように述べた。「広州コンミュン是中国革命の新たな出発点である」。1928年2月、コミンテルン執行委員会第九回総会の「中国問題にかんする決議」はロミナーゼの上述の観点を批判した<sup>(24)</sup>。コミンテルン第六回代表大会（1929年7月17日から9月1日まで開催）と中共六中全会（1928年7月開催）とは、いずれもロミナーゼと瞿秋白とを批判した。しかし、広州暴動に対しては一定の評価を与えた。コミンテルン第六回代表大

会の開催においては、瞿秋白・周恩来が大会に参加して、コミンテルン執行委員と候補執行委員とに当選した。瞿秋白は民族・植民地問題についての発言を行なった。

コミンテルン六回大会および中共六回大会以前、コミンテルン指示を貫徹し執行するにさいして重要な役割を果たした者は、コミンテルン中国駐在代表であった。1928年の上述のふたつの会議以後、コミンテルンが中国に派遣した代表は、きわめて少なく、その期間は短く、なかには何の働きもしない者もいた。1929年と1930年には上海のコミンテルン極東ビューローに二人のドイツ人がいたが、ほとんど働きをしなかった。1930年末から1931年初めにかけてはミフがやって来た。彼の滞在期間はきわめて短かったが、彼が革命に与えた危害は甚大であった。スイス人ノーラン（Neulens）は赤色救援会の人物であったが、1931年、中国で逮捕された。これ以後、中共のコミンテルン駐在代表が非常に重要な役割を果たした。1928年以後、中共のコミンテルン駐在代表団は、瞿秋白、張国燾、鄧中夏、王若飛、黄平、余飛によって構成されていた。瞿秋白を長とするコミンテルン駐在中共代表団は、ミフの「左」翼セクト主義と矛盾をもっており、ミフのあやまった主張を牽制した。彼らはつねに積極的な役割を果たした。

第二に、コミンテルンによる世界革命の情勢をめぐる分析と、李立三の「左」翼日和見主義路線に対する是正とについて。

すでに1928年、コミンテルンは「第三の時期」の理論<sup>(67)</sup>を提起して<sup>(25)</sup>、世界革命の高揚の到来を強調した。1929年資本主義世界に経済危機が発生し、「第三の時期」の理論的影響はさらに大きなものとなった。1929年中東鉄道事件が発生して、張学良は鉄道管理権をすべて回収し、中ソは断交した。コミンテルンは中国に「武装してソ連を防衛すること」を要求し、中共に軍事的威嚇を示すよう要求した。コミンテルンの都市中心論は、つ

まりは革命高揚時に大都市を奪取することであった。それは、中国ソヴェトは大都市を奪取して労働ソヴェト政府を結成することができるというようなものであった。1929年、中国問題をめぐるコミンテルンの主要な傾向は、「左」傾であった。1929年にブハーリンの右傾に反対したのち、中国革命の問題においても反右傾が強力になり、そこで「左」への発展が加速された。コミンテルン駐在の中国代表団団長瞿秋白は、コミンテルン執行委員会第六回総会において、コミンテルンの右傾化は植民地問題においても出現していると述べなければならなかったのであった<sup>(26)</sup>。

1929年、コミンテルンは2月、6月、10月に中共中央に対して指示を与えた。いずれも政策を「左」の方向へむけて発展させるよう要求していた。1929年2月7日、コミンテルンは都市活動にかんして中国共産党に与えた書簡のなかで、中共中央のある通告に批判を加えた。その通告は、革命の高揚が「近い将来」到来することを否認して、新たな高揚が「近い将来」到来するとする見解は「まったくおろか」とであると述べていたのだ。コミンテルンが都市活動にかんして中国共産党に与えた書簡は、実際には中共中央の右傾化を弾劾し、革命の高揚がまったく存在しないという情勢にありながら、中共中央に革命の高揚がすでに到来したということを承認するよう要求していた。1929年6月7日、コミンテルンの農民問題にかんする指示は、対富農政策を富農に対する中立から富農に対する反対へと転換するよう中共に要求した。中東鉄道事件が発生すると、「武装してソ連を防衛せよ」とする指示の中でコミンテルンは、「中国はすでに重大な全国的危機の時代に入った」と述べて、国民党政府の十大危機<sup>(28)</sup>を指摘した。それによれば、蒋介石政権はすでに一撃にも堪えられぬほどに弱まっており、即座に革命を発動しなければならないというのであった。これらはすべて、李立三路線の発生と関係をもっていた<sup>(27)</sup>。

李立三路線の発生は偶然なものではなく、コミンテルンに責任があった。李立三路線の発生した時は、陳独秀、瞿秋白の時とはちがって、彼と行動をともにするような中国駐在コミンテルン代表はおらず、かの二人のドイツ人は反対の態度を採っていた。李立三路線の是正はコミンテルンにその功績を帰すべきである。だが、李立三路線を是正した指導的思想と方法とは、かえって中国革命に対して重大な危機をもたらした。

第三に、コミンテルンによる政治上の「左」傾化、組織上のセクト主義、ならびにミフの支持下における王明の「左」翼日和見主義支配について。

コミンテルンは李立三路線の是正にあたって、政治的に右派に対する反対を継続して「左」翼日和見主義を助長しただけでなく、組織的にはセクト主義感情をあらわにして、中国の老幹部のコミンテルンに対する忠誠を疑った。事実、コミンテルンは中国革命の問題において一連のあやまちを犯しながら、それまで自己批判をせず、あやまりをひたすらに中国共産党員にかぶせ、かつ手きびしい打撃を与えていた。それゆえ、不満感情が発生したことは当然の道理であった。コミンテルンはこの不満を圧殺するために、次のように述べた。中国の党内には小集団が存在し、「コミンテルンに反対する闘争」が今まさに実行されている、と。蔡和森は「党の先達」が「すでに新たな運動を行ないえなくなっている」と承認するように強いられた<sup>(28)</sup>。こうした「左」翼的な政治路線および組織路線の影響下に、モスクワの中山大学<sup>(29)</sup>で結成された王明のセクト集団はミフの支持を得て党中央の権力を奪取した。同様に、何孟雄らの実際的な活動経験を有する幹部を「右派」集団を形成したとして、大量に党から排除した。

王明はもともとの地位は党内では低く、中共六回大会の時には代表ですらなかった。だが、王明派はモスクワ中山大学第二代校長ミフに支持を与えられていた（モスクワ中山大学には三名の歴代

校長がおり、第一代校長はラディック、第三代校長はヴェーゲルであった)。そこで、彼らは急速に昇進した。ミフとコミンテルン駐在中共代表団団長瞿秋白とは長らく折り合いが悪かった。そこでミフは、瞿秋白の中共代表団団長の職務を自分が支持するセクトの人物と交替させようと早くから考えていた<sup>(29)</sup>。中共四中全会でミフが王明による党中央ヘゲモニー奪取を支持すると、王明、康生は瞿秋白、鄧中夏、王若飛らのコミンテルンにおける任務を奪取してしまった。王明はコミンテルン執行委員会第十二回会議(1932年8月27日から9月15日まで)およびコミンテルン執行委員会第十三回会議(1933年12月)に参加し、康生は王明とともに後者の会議に参加した。この時、中国革命をめぐるコミンテルンの政策は次のような状況——即ち、民族矛盾が上昇し階級矛盾が下降して、日本帝国主義が日ましに主敵となり抗日救国運動が主要な国内革命運動になってきた状況——と根本的に遊離していた。そして、土地革命の実行により封建主義に反対し、民族革命の実行により帝国主義に反対すること、統一戦線の実行は上層から行なうことはできず下層大衆の中においてのみ可能であること、をかたくなに提起していた。コミンテルンは中国革命をめぐる政策を4年間にわたって変更せず、きわめて大きな危害を中国革命に与えた。コミンテルンが中央根拠地に派遣した軍事顧問李徳、別名華夫(オットー・ブラウン、Otto Braun)も軍事面において重大なあやまちを犯した。

長征の直前、中共中央とコミンテルンとの無線による連絡は途切れてしまったので、中共中央は一層大きな活動の自由を得た。遵義会議はコミンテルンと王明の「左」翼路線とその政策を終結させた。そこで、中国革命は毛沢東思想の指導下に前進することになった。これは中国共産党の成長、発展の必然的な結果であり、コミンテルンと中国革命との関係発展の必然的な結果でもあった。

遵義会議は、コミンテルンと中国革命との関係史上における革命であった。しかし、これは中国共産党がコミンテルンに対して反対の立場を取ったことを意味するわけではない。いな、この革命はコミンテルンを支持するという大前提の下に行なわれたのである。第一に、組織上は張聞天を総書記に選んだことである。第二に、長征の部隊が四川省西部に到着してから陳雲をコミンテルンに派遣して遵義会議の状況を報告させたことである。第三に、遵義会議決議では博古、李徳の軍事面のあやまりは指摘したが、党の政治路線は肯定したことなどである。これらの点はいずれもコミンテルンの要素を考慮に入れたものである。事実、遵義会議はコミンテルンの承認をやはり得たのである。

第四に、コミンテルン七回大会の反ファシズム綱領と中国共産党の統一戦線戦術の制定について。

世界の政治情勢の発展、ドイツ・ファシズムおよび日本ファシズムによる西方、東方からの対ソ連威嚇によって、ソ連は反ファシズム統一戦線を建設する必要を感じた。西欧の各国共産党も、支配階層が連合してファシズムに対抗するよう要求した。こうして、1935年7月25日から8月20日までの期間、コミンテルンは第七回代表大会を開催して、その「左」傾政策を終結させ、人民戦線および統一戦線の建設を提唱した。ディミトロフによる「ファシズムの攻勢と、ファシズムに反対し労働者階級の統一をめざす闘争におけるコミンテルンの任務」と題する報告の決議、ピークによる「コミンテルン執行委員会の活動について」と題する報告の決議、が採択され、マヌイルスキーが「コミンテルン第七回大会の総括」を行なった。

中国共産党からコミンテルン七回大会に参加した者は、王明や康生らばかりではなかった。老プロレタリア革命家の陳雲、呉玉章らや林育英(張浩)も会議に出席した。この時、王明が起草し、スターリン、ディミトロフの同意を得た「八一

宣言が公布された。「ハー」宣言は抗日民族統一戦線の戦術を提起し、また、「国防政府」「抗日連軍」等の政府、軍隊の組織形式の問題をも提起した。組織上は、コミンテルン七回大会の決定によれば各国党の指導者は「共産主義運動の政治的任務および戦術的任務を独自の正確に解決」し、「一般的には、各国共産党内の組織上の案件に直接干渉してはならない」のであった<sup>(30)</sup>。コミンテルン七回大会は王明・周恩来・張国燾・毛沢東をコミンテルン執行委員として、康生・秦邦憲を候補委員として選出した<sup>(31)</sup>。コミンテルン執行委員会には多くの中国人委員が選出されたのである。

中国労農紅軍が長征によって陝西省北部に到着すると、コミンテルンと中共中央との関係は回復した。コミンテルン第七回大会に参加した林育英（張浩）が帰国し、党中央はコミンテルン決議の伝達を受けとった。瓦窑堡会議が開催され、日本帝国主義に反対する戦術を制定した。中国共産党は幾千万幾百万の民衆を抗日民族統一戦線に組織することに着手し、中国革命の新局面をきり開いた。この転換はコミンテルンに功績がある。しかし、蔣介石と統一戦線を樹立した分野（王明はすでに1935年11月に蔣介石との統一戦線樹立を提起していたが）、国防政府・抗日連軍・土地革命などの分野、両広事件<sup>(32)</sup>・西安事件の分野では、毛沢東を代表とするマルクス・レーニン主義路線とコミンテルンならびに王明を長とする中共代表団との間には、やはり相異があった。抗日戦争初期の第二次王明路線の出現は、この矛盾の発展した結果である。

第二次国内革命戦争の時期は、コミンテルンと中国革命との関係が発展し変化した時期である。まず、この時期の前期においては、コミンテルンと中国革命との関係は非常に緊密なものであったが、それは主としてコミンテルンと中国共産党との緊密な関係なのであった。国民党は革命の旗ではなく、反革命の旗をかかげていたのである。こ

の時期の後期になると、コミンテルンと中共中央との関係は一度途絶した。関係回復後には、コミンテルンと中国共産党との関係に新たな変化が生じた。次に、第二次国内革命戦争の時期には、コミンテルンは陳独秀・瞿秋白・李立三の路線のあやまりを是正し、王明・張国燾の路線のあやまりに対しては一定程度その是正を援助した。コミンテルン七回大会は正しい戦術転換をなしとげたが、それは重要な歴史的意義をもっていた。さらに、この時期には、コミンテルンは「左」翼的あやまりを犯し、中国革命に対して重大な危害を加えた。最後に、この時期の遵義会議以後、毛沢東を長とする党中央の指導下に、コミンテルンと中国革命との段階はひとつの新しい段階に到達し、中国革命とコミンテルンとの関係が正しく処理されるようになったのである。

#### 4. 抗日戦争とコミンテルンの解散

抗日戦争勃発後、中国共産党は抗日民族統一戦線を指導して、正しい戦争の戦略を策定した。しかし、王明が帰国すると、彼はコミンテルンと王明自身との主張によって中国革命を指揮しようと試み、さらには自分による党中央の指導的地位の篡奪をねらった。まもなく、彼の意図はことごとく失敗した。同時に、王明もコミンテルンにおける中共代表の資格を喪失し、その後は周恩来、任弼時らの同志が、短い間コミンテルン駐在代表の活動を行なった。毛沢東を長とする党中央は、第二次王明路線に反対したのち、ひき続きスターリンを支持してコミンテルンの指示に対しては分析的態度で臨み、コミンテルンのあやまった主張を拒否する際には、コミンテルンとの団結の維持に注意を払った。コミンテルンとの団結を堅持するためには、1937年12月13日、政治局会議において「コミンテルン駐在中共代表団の活動報告にかんする中央政治局の決議」を提案し、コミンテルン

による指導とディミトロフによる援助とを肯定した<sup>(32)</sup>。1938年9月、コミンテルン執行委員会幹部会は、中国共産党代表の声明を聞いて中国共産党の政治路線に完全に同意する旨声明し、張国燾の党籍剥奪にかんする中共中央の決定を承認した<sup>(33)</sup>。

しかし、抗日戦争勃発後のコミンテルンと中国革命との関係の発展は次のことを明らかにしている。即ち、集中的な指導を国際的規模で行なうことおよび指導の中心が現実から遠く離れていることによって克服不可能な数多くの障害に遭遇していたということである。1943年5月14日、ディミトロフらの署名による「コミンテルン執行委員会幹部会のコミンテルン解散についての提案書」が起草された。1943年5月26日、「中国共産党中央委員会のコミンテルン執行委員会幹部会のコミンテルン解散提案についての決定」が公布され、毛沢東は中共中央政治局主席の資格で、コミンテルン解散問題についての報告を行なった。報告は次のように指摘した。即ち、マルクス・レーニン主義の原則、革命の組織形態は、革命闘争の必要性に従うものでなければならず、組織形態が闘争の必要性和適合しないならば、この組織形態を取消さなければならない、ということである<sup>(34)</sup>。1943年6月10日、コミンテルンは解散された。

抗日戦争の後期にコミンテルンは解散された。抗日戦争の前期および中期には、指導の中心が実際から遠く離れていたことにより克服不可能な障害に遭遇していたということが、明らかとなった。この時期、中国共産党はコミンテルンとの間に矛盾をもってはいたが、団結を維持していた。コミンテルンの解散は、中国革命の発展を阻止しなかったばかりか、中国革命に対して有利な影響をおよぼしたのである。

上述のコミンテルンと中国革命という問題に対する初歩的研究から、この研究課題に対する研究を強化することがきわめて必要であることがわか

ったであろう。だが、コミンテルンと中国革命という問題を解明することは、やはりきわめて巨大な任務である。この中の若干の問題は、すぐにも検討を深めるべきものである。このような問題が解決されないために、あるいは、認識上において前進することができないために、コミンテルンと中国革命の問題を正しく解明することが困難になり、真に思想を解放し立入禁止区域を打破することが不可能になってしまうのである。そこで、以下の問題について、未熟な意見をささやかながら述べてみよう。

コミンテルンが中国革命に対して決定的な役割を果たしたかどうかという問題について。コミンテルンの中国革命に対する役割という問題では、コミンテルンの中国革命に対する役割を根本的に否認するような観点は明らかに通用しないものであろう。しかし、コミンテルンの中国革命に対する役割は「外部的条件」「外因」であって、若干の役割は果たしたが、決定的な役割ではなく、決定的役割を果たしたのは中国自身であり、あるいは中国の指導者だけが決定的役割を果たすことができたのであると考える見方も存在する。

理論的に言えば、「外因」は「内因」を通じて作用するものである。しかし、一定の条件においては、「外因」も決定的役割を果たすものである。コミンテルンと中国革命という問題においては、中国共産党は幼年の条件下にあり、コミンテルンは中国共産党の理論・路線・方針・政策に対して決定的役割を果たした。歴史的には、中共中央はコミンテルンという世界的組織の中の一組織にすぎず、中共中央は中国共産党の路線・政策を独立して決定する権力ではなく、コミンテルンによって策定された路線・政策を貫徹させるという義務をもっていたにすぎなかったからである。コミンテルンの中国駐在代表や中国共産党指導者の個々の事件に対する役割についても、具体的な問題を具体的に分析しなければならず、主観的に臆測に

よって判断すべきではない。コミンテルン中国駐在代表の功罪を中国共産党指導者よりも上に置くべきではなく、中国共産党指導者の功罪をコミンテルン中国駐在代表や顧問よりも上に置くべきでもない。つまり、真相を究明して個々人の功罪を問うのであって、是非を混同したり、見当違いをしたり、身勝手にほめたりけなしたりすべきではないのである。

コミンテルンにおけるレーニン・スターリンの重要な役割とコミンテルンにおけるその他の人物の歴史的役割との問題について。コミンテルンと中国革命においては、レーニン、スターリンは非常に重要な歴史的役割を発揮した。しかし、コミンテルンは世界のプロレタリア政党の連合組織であって、コミンテルンの各代表大会、コミンテルン執行委員会、幹部会書記局、各地区ビューローで活動していた人は多い。コミンテルンの活動において一貫して肯定的評価を得ていた人物は少ないとはいえ、歴史的人物の歴史的役割に対してはいずれも歴史的分析を行わなければならない。レーニン、スターリンの重要な役割を肯定するからには、コミンテルンにおけるその他の人物の歴史的役割をも肯定しなければならない。たとえば、ジノヴィエフはコミンテルン成立からコミンテルン執行委員会第七回拡大会議までの7、8年間コミンテルン議長であった。ブハーリンはコミンテルン議長の職が取消されたのちの最初の政治書記であった。クーシネン、マヌイルスキーはブハーリンが解任されたのちのコミンテルン執行委員会における主要な指導者であった。ディミトロフはコミンテルン七回大会以後の総書記であった。このような歴史的人物やその他の歴史的人物に対しても、歴史的評価を行わなければならない。

ソ連の対中国政策と中国革命をめぐるコミンテルンの指示について。コミンテルンと中国革命という問題では、コミンテルンのある指示は往々にしてソ連の対中国政策の反映であった。歴史的に、

ソ連の対中国政策は中国民族の独立と民族解放とを支持するものであった。しかし若干の問題、たとえばすでに繰返し述べた中東鉄道問題やソ連軍隊による外モンゴル進駐問題などの国家的利益と民族的利益とにかかわる問題においては、ソ連政府と旧中国支配者との間に往々にして外交的および軍事的衝突が発生した。このような時には、コミンテルンは常に中国共産党に対してソ連の側に立つよう要求し、「ソ連を擁護せよ」「武装してソ連を防衛せよ」というスローガンを提起した。その結果、コミンテルンは旧中国の支配者と対立を生じたばかりでなく、中国の大衆から遊離して中国革命に対して損失を与えたのである。そこで、我々はコミンテルン指示を分析する際に、実際から出発して、それが中国革命の必要性から出発したものであったのか、それともソ連の対中国政策から出発したものであったのかということを吟味しなければならない。ソ連の対中国政策についても分析を行ない、それが中国民族の独立と民族解放とを支持したものであるのか、それとも中国の領土に損失を与えるものであったのかを吟味しなければならない。

コミンテルンの「左」右の傾向に対する反対闘争と中国革命に対するその影響について。コミンテルンは集中指導を強調し、厳格な規律を実行し、大きな権威を有する国際的組織であった。そのために、この組織は多くのことを集中しており、各国の特徴や各国の实际情况を考慮することは少なかった。「左」右の傾向に対するコミンテルンの反対闘争は多くがソ連の状況から出発したものであった。そこで、コミンテルンの反傾向闘争は、ある時には中国革命に有利であり、ある時には中国革命に不利であった。たとえば、コミンテルン七回大会の反セクト主義は中国共産党内の「左」翼的あやまりの克服に有利であったが、大革命後期のスターリンによる反トロツキー闘争は、主要には「左」翼反対であり、これは中国では、統一

戦線における連合を強調したあまりに闘争を無視することになった。1929年、中国で瞿秋白の「左」翼的あやまりがちょうど終結しようとしていた時、スターリンはブハーリンの右傾に反対し、中国共産党もこれに追随して反右傾闘争を行なったので、その結果、更に長期的な、更に損失の大きな「左」翼的あやまりを発生させてしまった。

コミンテルンによる中国革命のあやまりの是正方法とあやまりを犯した幹部を処理する政策について。中国革命が失敗に直面した時、コミンテルンの組織は常に、検査や指導はあまりせず、下級に責任を転嫁して、往々にして個人の処分によってあやまり又は失敗に結着をつけた。たとえば、大革命失敗時には、陳独秀、譚平山、ヴォイチンスキー、ボロディン、ロイらが相前後してコミンテルンの機構から追放された。広州暴動では、ロミナーゼ、ノイマンが災禍をまねくことになった。幹部政策では、コミンテルンは組織の更迭は重視したが、思想教育は重視しなかったし、幹部の更迭を頻繁に行なった。経験のある幹部は事態に通用できず、交代するごとに幹部の質はわるくなった。「一代は一代に如かず」であった。ソ連における粛清では、大量に冤罪事件が発生し、コミンテルンの幹部の多くは粛清拡大過程において、処刑されたり、有罪判決を宣告されたり、自殺したりした。多くの人々が天寿をまっとうすることができなかった。

結局のところ、コミンテルンと中国革命という問題を明らかにすることは、歴史学とマルクス・レーニン主義の理論研究の重要課題であり、中国共産党史、国際共産主義運動史の重要な構成要素である。しかし、長い間、コミンテルンと中国革命という問題は踏み入ってはならぬ禁止領域であった。いま、我々は迷信をとり除き、思想を解放し、林彪・「四人組」による極左路線の害毒と影響とを粛清し、活動に努めなければならない。コミンテルンと中国革命の問題をより明らかにする

ため、歴史学とマルクス・レーニン主義理論との研究の科学性や政党性を高めていくため、人民大衆の中における歴史学とマルクス・レーニン主義理論との崇高な威信を高めていくために、努力し奮闘しなければならない。

#### (原注)

- (1) 「中国社会各階級的分析」、『毛沢東選集』、4頁。「關於共産国際解散問題、毛沢東同志作詳尽報告」、『解放日報』、1943年5月28日。「論十大関係」、『毛沢東選集』第5巻、286頁。
- (2) С. Тихвинский——О проблемах новейшей истории Китая,《Вопросы истории》, 1973г. No2. [チフビンスキー「中国現代史の問題について」『歴史問題』、1973年第2号]
- (3) 『ロイ回想録』（中文訳、下冊、395頁、商務印書館刊）。原文は M. N. Roy's *Memoirs*, Bombay, 1964。
- (4) 『一九二〇年七月から八月におけるコミンテルン第二回代表大会（記録）』（ロシア語版）中の第5回会議記録、1920年7月28日、を参照。
- (5) 1925年3月15日『プラウダ』におけるヴォイチンスキーの文章。原載は次の文献。Martin C. Wilbur & Julie Lien-ying How, *Documents on Communism, Nationalism, and Soviet Advisers in China 1918-1927*, Columbia University Press, 1956.
- (6) コミンテルン第四回大会における劉仁静の発言「中国の情勢にかんする報告」を参照。同文献は以下の文献に収録。赫文穆特・格魯伯 ed., *Soviet Russia Masters the Comintern*
- (7) ラデック「東方問題にかんする意見」, *Soviet Russia Masters the Comintern*, pp. 381-389
- (8) 「国共合作にかんするコミンテルンの決議」を参照。〔同決議は、正しくは「国民党に対する中国共産党の態度に関する決議」という。『中

- 国共産党史資料集』第1巻所収]
- (9) ジェーン・デグラス編『コミンテルン・ドキュメント』（中文訳、第2巻34頁、世界知識出版社刊）。原文は、Jane Degras, ed., *The Communist International, 1919-1943 Documents*, 3 vols, Oxford University Press.
- (10) マーリン報告の英訳より。同報告は以下の文献に収録。*Soviet Russia Masters the Comintern*, pp. 364-375
- (11) 「中国共産党第三回全国大会宣言」。〔『中国共産党史資料集』第1巻所収〕
- (12) 魏琴〔ヴォイチンスキー〕「国民会議、軍閥和帝国主義」、『嚮導週報』97期、1924年12月31日。
- (13) エドガー・スノウ『中国の赤い星』、第4章。原文はEdgar Snow, *Red Star over China*
- (14) 鮑〔ボロディン〕顧問講演、陳導平筆記「中国革命的根本問題」、黄埔軍校同学会『黄埔潮』第12期、16-17頁。
- (15) M. Wilbur, *Soviet Advisers in China*, p. 228
- (16) 「論中国革命的前途」、『斯大林〔スターリン〕全集』（中文版）第8巻、321-334頁。
- (17) M. N. Roy, *Revolution and Counter-revolution in China*
- (18) ジェーン・デグラス編『コミンテルン・ドキュメント』（中文訳、第2巻475頁）。同時にベラ・クン『コミンテルン文献彙編』（中文訳、第2冊、387頁、三聯書房刊）参照。同書の原文はБела Куна, 《Коммунистический Интернационал в Документах—Решения Тезисы и Воззвания Конгрессов Коминтерна и Пленумов ИККИ, 1919, —1932》, Москва, 1933.
- (19) ハロルド・アイザックス『中国革命の悲劇』。原文はHarold Isaacs, *The Tragedy of the Chinese Revolution* Stanford University Press, 1951
- (20) 蔡和森『党的機會主義史』
- (21) エドガー・スノウ、前掲書、第4章。
- (22) デグラス、前掲書、中文訳第2巻、540-543頁。
- (23) 「中国共産党第六回代表大会決議案」。〔主要決議は『中国共産党史資料集』、第4巻に収められているが、当該引用部分是不詳〕
- (24) James P. Harrison, *The Long March to Power: A History of the Chinese Communist Party, 1921-1972*, New York, 1972, p. 155
- (25) 「新時期与共産国際政策之転変」（コミンテルン執行委員会『コミュニスト・インターナショナル』社説、同誌中文版、月刊、第1巻第2期、1930年3月15日、国際月刊社刊）
- (26) 瞿秋白「共産国際在目前殖民地革命的策略」（在十次全体会議上の演講）、『布爾塞維克』第3巻第1期、1930年
- (27) Richard C. Thornton, *The Comintern and the Chinese Communists, 1928-1931*, University of Washington Press, 1969, pp. 81-102
- (28) 「共産国際執委主席団對於立三路線的討論」、『布爾塞維克』第4巻第3期、1931年5月10日。
- (29) 瞿秋白とミフとの間の矛盾をめぐる問題については、Sheng Chong-liang (盛忠亮), *Sun Yat-Sen University in Moscow and the Chinese Revolution* University of Kansas, 1971, pp. 205-206 を参照。
- (30) 「關於共産国際執行委員会工作」（ピークの報告にもとづくコミンテルン第七回世界大会の決議）、『第三国際動向』、東方出版社、1939年版。
- (31) Harrison, *The Long march to Power*, p 261
- (32) 「中央政治局關於中共駐国際代表团工作報告」
- (33) 「共産国際的決定与声明」

(34) 「關於共產國際解散問題，毛沢東同志作詳尽報告」，『解放日報』，1943年5月28日。

(訳注)

- (1) 東方勤労者共産主義大学（略称クートヴェ）：1921年4月設立。ソヴェート・ロシア領内および近隣の東方諸国の革命幹部を養成するための政治大学。
- (2) 「三・一八」：1926年3月18日，北京で段祺瑞の軍隊が大衆デモを弾圧した事件。40人以上が虐殺された事件で，この後段政府は李大釗を含むこのデモ隊の指導者らの逮捕を命令したため，華北の共産党組織は大打撃をうけた。
- (3) 広東商団：匯豊銀行の陳廉伯・陳恭受らを首領とする広東商人の警衛軍。1924年10月，商団事件が発生し，軍官学校学生軍の力で商団軍を解散した。
- (4) 中山艦事件：1926年3月18日から20日にかけて発生した事件。蔣介石が，軍艦中山艦（艦長李子龍は共産党員）の移動を「暴動を企図している」と弾圧し，さらにこれを口実として共産党員を逮捕した事件。以後，国民党中央における蔣介石の権限が強化された。
- (5) 五月指示：この指示の内容は「土豪劣紳の土地を没収すべし」「現在の信頼すべからざる領袖を消滅し，五万の労農分子より成る新軍を創設せよ」等から成り，この指示のコピーをみせられた汪精衛は驚き狼狽したという。
- (6) 「継続革命」：中国革命が，ブルジョア民主主義革命から社会主義革命へ進んでいくという二段階革命論ではなくて，民主主義革命が一段落することのないまま社会主義へと接続していくという革命理論。
- (7) 「第三の時期」の理論：当面の国際情勢が「第二の時期」（資本主義の部分的安定期）から「第三の時期」（国際的革命情勢の新たな高揚期）へと転換しつつあるとする情勢認識。

- (8) 国民党政府の十大危機：軍閥混戦の再発，「国民党改組派」（汪精衛ら）の形成，中東鉄道事件の発生，投資要請が列国から拒否されたこと，大衆運動の完全制圧の失敗，民族工業の衰退，農業危機の長期化，民衆生活の全般的悪化，労働運動の高揚，農民運動の復活などを指す。
- (9) モスクワ中山大学：正式名称は孫中山記念中国勤労者大学（略称クートカ）。1925年11月モスクワにて開校。中国革命情勢の進展にともない。もっぱら中国人留学生を收容したが，国共合作時期には多くの非共産党員が進学した。1929年，中国勤労者共産主義大学と改称。トロツキー・スターリン論争の影響により，30年秋閉鎖。
- (10) 両広事件：1936年6月，広西省軍閥の李宗仁・白崇禧，広東省軍閥の陳済棠らが「抗日救国軍」を組織して，反蔣「抗日」連合を形成した事件。8月，蔣介石によってこの連合軍はつぶされた。（内田知行・訳）

＊ ＊ ＊

**訳者付記：** この論文は，訳者の知るかぎりでは，現代中国の研究者によって論じられた表記のテーマについての最初の体系的研究である。一読して気がつくことは，この研究が一定の政治的立場を明らかにしつつも，けっしてイデオロギー過剰の弊に陥ってはいない点である。コミンテルンを中国革命に対して決定的役割を果たした「外因」と規定し，レーニン・スターリン，更には多くのコミンテルからの使者たちの功罪を中国革命の発展段階に則して分析している点，コミンテルン自体の革命戦略とソ連の国益追求のための対華政策とを区別し，それをふまえてコミンテルンの指導の質を吟味しようとしている点などは，従来の中国における研究には見られなかった論点であろう。また，欧米の研究蓄積を無視できぬものとして摂取しようとする研究は目下の中国における現代史研究の水準を示す好個の指標であるといえよう。なお，筆者は北京大学教員であり，「中国共産党歴史学大綱」（北京大学学報 1979年4期）の著者の一人である。